

東京2020パラリンピックの成功と
バリアフリー推進に向けた懇談会
キックオフミーティング

—議事録—

日時：令和元年6月10日(月) 10時00分～11時30分

場所：東京都庁第一本庁舎7階大会議室

【横山理事】

それでは、定刻になりましたので、「東京 2020 パラリンピックの成功とバリアフリー推進に向けた懇談会」キックオフミーティングを開会いたします。意見交換に入るまでの間、進行役を務めさせていただきます、東京都政策企画局理事の横山でございます。よろしくお願いいたします。

はじめに、会議の公開について申し上げます。

本日の会議は冒頭から終了まで、報道機関の皆様にも公開で行います。また、本日の会議資料、議事概要につきましては、後日ホームページ上に公開いたしますので、ご了承ください。

次に、本日の出席者のご紹介ですが、大変恐縮ですが、時間の都合もございますので、座席表をもって代えさせていただきますと存じます。なお、テリー伊藤様は所用のため、後ほど到着されると伺っております。

では、開会に当たりまして、小池知事よりご挨拶を申し上げます。知事、よろしくお願いいたします。

【小池知事】

みなさま、おはようございます。

今日はこのような足元の悪い中、特に車いすの方々など、大変ご苦労が多かったと思いますが、「東京 2020 年パラリンピックの成功とバリアフリー推進に向けた懇談会」、ちょっと長いですがけれども、お集まりいただきましてありがとうございます。

今日は、キックオフミーティングということで、第1回、これから来年のオリンピックまでが410日、そして、パラリンピックまで442日となりました。あっという間に本番がやってくるかと思えます。一方で、バリアフリーと、そしてまた、パラリンピックというのは、まさしく、同義語であると考えておりまして、そして、この東京、今後ますます高齢化も加速をしてまいります。そしてまた、もちろん、障害を持つ方も多数この東京にお住まいになって、生活をしておられる。毎日色々なご不便もある中で、感じておられることもあるだろうと思えます。せっかくのパラリンピック、2回目のパラリンピックを東京で開催するというのでございますので、これをきっかけに、ますます東京が、誰にとっても、障害がある方もない方も住みやすく、そしてまた、海外から来られる皆さま方も、障害持つ方もない方も、多言語といいたましようか、海外からも色々な方が来られますので、言語の問題でもこれもバリアかもしれない。そういったことからですね、皆さま方、それぞれご専門が異なりますけれども、皆さま方からご意見を頂戴して、そして、パラリンピックをまず成功させていく、そしてその結果、「あ、あそこから東京が変わったんだよね。より誰にも住みやすくなったんだね。」という、そのようなレガシーを皆さんとともに残していきたいと考え

ております。よって、ハードの面とソフトの面、両方のバリアフリー、これに取り組んでまいりたい、そして、大会を盛り上げてまいりたいということから、今日はこの懇談会の立ち上げに至ったわけでございます。

すでに、名誉顧問といたしまして、自転車で走っておられるときにお怪我をなさいまして、今車いすで生活をしておられる、元自民党の総裁でいらっしゃる、財務大臣をなさいました、谷垣禎一先生に、この会の名誉顧問をお引き受け頂いております。

学識経験者の皆さま方には、大会を契機にバリアフリーの具体化、実践的取組についてご助言をいただくことといたしております。パラアスリートの皆さま方には、パラスポーツの魅力の発信、バリアフリーの取組についてのご意見を伺わせて頂きます。それから、各界の皆さま方には、パラ応援大使として、パラスポーツの応援と、共生社会への理解促進のご助言・ご助力を賜りたいと考えております。こちらに、パラスポーツパスポートという赤いパスポートがございます。これには、22のパラスポーツの競技、これを、「観た・やった・応援した」という方々には、こういうハンコがそれぞれ押されます。全部で22競技がございます。自慢しますが、すべてわたくし、コンプリートいたしました。水泳など、泳ぐわけではありませんけれど、「がんばれー！」と応援させて頂いて、それでハンコを頂いたり、実際に自分で競技を試した、シッティングバレーとかですね、結構難しいんですよ。それから、根本さんとも車いすバスケットなど実際やってみましたが、遠いんですよゴールが。車いすで低い分ですね。そういったことから、実際に選手の皆さんからは、車いすでの生活のところで、「ここがまだ東京足りないよ」とかですね、ビシバシとご意見を賜ればと思います。それから、大学生じゃなくなっちゃったんですか？ 欽ちゃん。これからも、パラの応援をして頂けるということで、どうぞよろしくお願いします。本当にいろんな分野からの皆さま方、中畑さんはオリンピック出場経験がありということですね。オリンピックということですし。

(中畑氏「なんでも聞いてください」笑)

わかりました、大変心強いです。ということで、今日はキックオフとなります。どうぞ今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございます。

【横山理事】

続きまして、先日、本懇談会の名誉顧問にご就任いただきました谷垣禎一様から、ビデオメッセージを頂戴しておりますので、ご紹介させていただきます。前方のモニターをご覧ください。

(名誉顧問ビデオメッセージ放映)

「この度、パラリンピックの成功とバリアフリー推進に向けた懇談会を都知事が立ち上げられまして、私は小池知事から、その名誉顧問をお申し付け頂きました。大変微力ですが、少しでもお手伝いできればと思っております。

バリアフリー、大分、都民の気持ちの持ち方も、障害を持った者を手助けして、ともに生活をしていこうという気持ちが随分強まってきたと思いますが、細かいところはまだまだいろんな工夫が必要なのかなと思っています。それから、パラリンピック、これは何としても成功させて、障害を持った方が頑張っておられる、その姿を私も拝見したいと思っていますが、望むべくは、このパラリンピックの成功が、障害を持った者も、ダジャレじゃありませんが、生涯スポーツに親しんでいく、自分自身が障害を持ちながらもスポーツをやっていく、そういう大きな動きにつながればなと思っています。でも、これはなかなか大変なことですから、多くの方々の知恵を頂かなければならないいんでしょうね。小池都知事に色々ご指導いただいて、少しでもそのためのお手伝いができるばと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。」

【横山理事】

続きまして、都の施策紹介に移ります。施策につきましては、事務局から説明させていただきます。

<事務局>

東京は世界で初めて2回目の夏季パラリンピックを開催する都市です。パラリンピックは、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に、共に支えあう共生社会の実現に向けて、社会の在り方を大きく変える力があります。

東京2020パラリンピック競技大会は、来年の8月25日から9月6日までの13日間に、22競技540種目が実施されます。スライド下段は、東京2020パラリンピックのマスコットであるソメイティによる22競技のポーズです。

この大会から新たに加わるバドミントンとテコンドーをはじめ、まだ十分には知られていない競技もあり、今後、多くの都民・国民の皆様にご各競技の魅力を知っていただき、本番の会場を満員にして盛り上げていきたいと考えています。

本日は、競技ごとに見どころを解説したハンドブックをお配りしていますので、ご活用いただければ幸いです。

なお、パラリンピックの観戦チケットは、今年の夏から販売を開始する予定です。

次に、大会を契機としたパラスポーツの振興です。

パラリンピックを満員の観客で盛り上げ、東京2020大会以降も障害者スポーツを社会に根付かせるために、都は様々な取組を実施しています。

1つ目が、競技体験やパラリンピアンによるデモンストレーションでパラスポーツの迫力を直に感じていただく、様々なイベントの開催です。

2つ目が、パラスポーツファンを増やす「TEAM BEYOND」というプロジェクトで、登録頂いた方へのパラスポーツの情報提供や観戦会の開催等を行っています。現在、登録者は126万人となっています。

3つ目が、パラリンピックの実施種目に限らず、広く障害者スポーツを知っていた

だくと同時に、障害のある方がスポーツを始めるきっかけづくりになる、「チャレスポ！ TOKYO」という参加体験型のイベントの開催です。

4つ目に挙げていますが、パラスポーツは、実施できる場所や機会の拡大のほか、支える指導員・スタッフといった人材の育成が求められています。加えて、国際舞台で活躍できる競技力の高い選手の発掘や育成も欠かせません。こうした課題に都は現在取り組んでおり、大会後も見据え、パラスポーツの裾野の一層の拡大に努めているところです。

次に福祉のまちづくり推進計画の概要です。

東京都は、条例に基づき、福祉のまちづくり推進協議会の意見を踏まえて、「福祉のまちづくり推進計画」を策定し、福祉のまちづくりに関する施策を総合的かつ計画的に推進しています。今年3月には、東京2020大会とその先を見据え、更なる施策のレベルアップを図っていくため、新たな5か年計画を策定しました。

この計画は、「誰もが、自分の意思で円滑に移動し、必要な情報を入手しながら、あらゆる場所で活動に参加し、共に楽しむことができる社会」の実現を目標としています。

推進に当たり当事者の参加やその意見の反映に留意しつつ、資料の下段に記載の「5つの視点」に立って、全庁を挙げて施策を推進していきます。「主な施策」としては、都内の公共交通や道路・建築物・公園等のハード面のバリアフリー化や災害への備えを進めるとともに、情報バリアフリーや心のバリアフリーの推進などのソフト面の取組を展開していきます。

東京に暮らし、東京を訪れる全ての人が、安全、安心、快適に過ごすことができるよう、都民や事業者の皆様、そして区市町村と手を携え、ユニバーサルデザインの先進都市東京の実現に向けて、一層の施策の充実に努めてまいります。

続いて、推進計画に基づき、東京2020大会に向けて加速させている具体的な取組を紹介させていただきます。

競技会場周辺の主要駅等でのホームドアやエレベーターの整備や、競技会場周辺等の道路の段差解消・点字ブロックの整備などを進めています。

新たに整備する都立の競技施設は、設計段階から障害のある方や学識経験者から意見を伺い、車いす目線に配慮した観客席の整備などを行っています。また、宿泊施設については、車いす利用者、視覚障害者、聴覚障害者等、様々な障害に配慮した整備の支援を充実させたほか、全国で初めて、一般客室についても出入口幅などの基準を設けました。

また、情報については、民間のアプリ事業者に活用いただけるよう、公共施設や鉄道駅のトイレの情報を公表するなどの取組を行っています。

多くの応募をいただいた大会関連ボランティアについては、育成を図るとともに、様々なボランティア活動への参加を促す情報提供も行っています。

説明は以上です。

【横山理事】

続きまして、意見交換に移ります。恐れ入りますが、ご発言いただく際は、お手元のマイクのスイッチを押してからお話しください。お話が終わりましたら、再度スイッチを押していただければと思います。よろしく申し上げます。それでは、ここからの進行は座長の知事をお願いいたします。

【小池知事】

それでは、ここから、皆様方のご意見を拝聴させて頂きたいと存じます。今ご説明しましたように、ハード面での対策は着々と進めております。ホームドアの設置などもですね、各線が乗り入れていると、車両の種類が違ったりするので、ドアの設置の場所などを設定するので、少し時間がかかっているとか、それぞれ事情はありますが、着々と進んでおります。また、歩道などの段差につきましても、ゼロにすると車道との区別がつかなくなるということで、目の不自由な方からすればですね、むしろちゃんとわかるようにしてほしいとか、これまでも色々なご意見をいただいて進めてまいりました。でも、まだまだ足りません。そこで、皆さま方からご意見をいただくとうことでございます。

それでは、こちら回りからさせて頂きたいと思いますので、最初に、田植えの方お忙しい、色々と社会的な活動をして頂いています、市川海老蔵さんから、お願いしたいと思います。お願いいたします。

【市川 海老蔵様】

おはようございます。

オリンピック・パラリンピックについては、時間もないと思いますので、あまりお話しするつもりはなかったんですけど、バリアフリーのことについて、私なりに感じたことをお話させて頂きたい。

妻が闘病中に、最後の方、車いすで生活をしておりまして、病院に行くときや様々なことで困難があったなあということがあったり、この度このようなお話を頂戴し、私が感じたことを端的にお話させて頂きます。

10年間でバリアフリーのレベルは非常に上がってきたというふうに聞いています。しかし、シンガポールや上海、台湾などのアジア各国に比べて随分劣っているところが多いと聞いています。それは、前回のオリンピックの時に環境のインフラ整備をしたために、それから時間が経っているために、ずいぶん今が古く感じるようになってきたと。つまりは、2020 今最新の設備を整えたところで、次の未来には古くなるわけですが、今最善を尽くすべきではないかなと思っています。

細かいところで言うと、エレベーターの大きさが海外に比べて圧倒的に小さいです。

車いすが2台入ると限界だと思われているようでございます。パラリンピアンの方々が団体で行動したときに新幹線なども心配で、車いすは、新幹線に3台入るとそれ以上なかなか使用できない、通路しか居場所がないという状況なので、車いすの方が大勢来られる時に、新幹線移動はもちろん、電車移動もたくさん、タクシー移動もたくさんあると思うので、その対応を考えられた方が良いのではないかと。電車の改札口も、車いすの方専用の入口があるといいんですけども、無い場合は、駅員さんの窓口を通らなければいけないと。そうすると、混雑しているときに大変困っていて、私も東京駅とか、品川駅、特に品川駅は大変小さいので困るんですけども、悪気がなくてもぶつかる、意見がぶつかるところを目にすることがたまたま多いので、品川駅、渋谷駅、東京駅はやはりそういうところを考えられた方がいいのではないのかなと感じます。

あと、心のバリアフリーについては、知事もお話されていましたが、大分進んでいるようでございます。これはやはり、2020年のパラリンピックへの効果が出ているのかなと。しかしながら、今、知事のお言葉にあったように、言葉のバリアフリーに関して言うと、日本人には比較的その辺が非常に難しいのかなと感じました。

また、ジャパントクシーが、導入されたことによって、タクシーでの移動が解決したのではないかなと思いましたが、まだまだ難しいと。特に、トヨタが出しているミニバンタイプのスロープ自動車、ヴォクシーとか、シエンタとか、ノアとか、僕の友達が車いすの方が多いので、乗るときに、そういうときがあると便利なので、ぜひあれがいっぱい来年のパラリンピックに間に合って、そういう、ジャパントクシーのみならず、そういうタクシーが導入されたらいいなあとと思っています。あと、空港でも公共施設で、自動運転カートとか、もっと必要なんじゃないかとか、東京都ではないんですけども、成田空港、羽田空港も、車いすのままリムジンバスに乗れないので、いろいろ制限があると。ですから、そのリムジンバスにも、車いすが乗れるようなことを考えたらどうだろうかということを感じました。よろしくお願ひします。

【小池知事】

ありがとうございます。とても具体的な、10個くらいありましたね。どんどん出していただければ。ありがとうございます。それでは、鈴木亜久里さんよろしくお願ひします。

【鈴木 亜久里様】

皆さんこんにちは。鈴木亜久里です。仕事柄、長く海外に住む時期がありまして、私が主にF1の生活で、海外で生活していたのは、今から30年くらい前ですかね。30年くらい前に海外で、ヨーロッパでの生活がメインだったんですけども、その頃を振り返ると、日本ではほとんど車いすの方々が外に出る機会も少なかったし、いろんな部分でヨーロッパと違うなど。もちろん、バリアフリーの施設の話もそうすけ

れども、一番大きいポイントは、施設を新しく作っていったり、それを良くしていったりという部分では、必ず限界が来る、限界があるものだと思うんですよ。エレベーターの問題、段差の問題、階段の問題。でも、向こうにいて、生活していて、一番大きなバリアフリーというのは、人と人との心じゃないかな。住んでいる方々が、車いすの方々が一般の生活の中で、こんなに一般の人たちと触れ合いというのかな、本当に助け合うというか、普通にその辺の感覚が、普通の生活ができるような、人々の接し方がすごく大きく感じます。もちろん、30年前のヨーロッパもバリアフリーの施設だとか、そういう部分は少なかったんだと思うんですけれども、僕の場合は、サーキットでレースをしている移動しているとき、飛行場、ありとあらゆるところで移動していたわけですが、その辺のところはね、一番大きい、自分としてのインパクトかなと。まあ、これから、日本もこれから、だんだん施設に関しても、いろいろバリアフリーの部分が増えてきたと思うんですけれども、やっぱり、一番大きくしていかなければならないのは心のバリアフリー。先ほど、お話に出ましたけれども、もちろん言葉のバリアフリーなんですけれども、言葉がなくても、心はひとつだなという部分があるんで、その辺を重点的にやってもらえると嬉しいなと思います。ありがとうございました。

【小池知事】

ありがとうございました。テリー伊藤さんは遅れてご参加でございますので、次に葉加瀬太郎さんお願いします。

【葉加瀬 太郎様】

はい、葉加瀬太郎です。今回、この中で僕は、音楽家として参加させていただいていますが、僕の場合は、ちょうど日本とイギリスと半々くらいの生活で、ロンドンでの生活を12年続けています。今回のパラリンピック、事前に伺っていますが、前回のロンドンパラリンピックの成功を事例として、どこまで近づけるか、あるいは超えられるかということ伺ったので、ロンドンに1年の半分ぐらいではありますが、12年間住んできた者として、イギリス、ロンドンの状況、日常ということをお話しさせていただくとすれば、まずは、障害者という言い方よりも、イギリスでは整理できないことがある。全てひっくるめている。今、亜久里さんがおっしゃったように、人と人とのふれあいというのが、ヨーロッパあるいはアメリカの、かもしれませんが、私はアメリカの経験がないものですからわかりませんが、健常者と障害者だけではなく、あるいは外国人と自国の人、あるいはもっと突き進んでいくと、普通の人と皇室の人、あるいは貴族の人みたいなところも含めて、メディアとかもですね、よく言うコンプライアンスがうんぬんかんぬんと……皆さん、口を閉ざさなきゃいけないところが、もっと開かれていると思います。あとは宗教の問題もある、一日一善ということもある、と思うのですが、バスに乗っていても、地下鉄に乗っていても、これは車いすの方だけでなく、おじいちゃん、おばあちゃんでもそうです、妊婦の方もそうです

が、すぐに手を差し伸べる、これは若い人も本当にヒップホップしているような人が、スッと席を譲るとか、というのが日常の生活の中で、大変根付いているということは申し上げられるんじゃないかなと思います。これは、どんどんどんどん外国人が入ってきて、東京もこれから気をつけなきゃいけない、我々、日本人がそれを気にしなきゃならないことなんじゃないのかなと日頃感じているところです。

ロンドンは今、大体70%くらいが外国人といわれています。ですから、バスに乗っていても、地下鉄に乗っていても、逆に言うと、イギリス英語は聞こえてはきません。ただ、英語というものを使って、ストリートに出たときは、外国人同士がコミュニケーションするツールとして、いわゆるネイティブではない人たちの英語というものが、ちゃんと根付いているということです。いろんな方々とお話しする中で、やっぱり日本人のコンプレックスにいつも英語があるというふうに聞きますけれども、それはネイティブのように発音しようとか、ちゃんと話そうとか、文法的にあっているかあっていないか、気にするからしゃべれないのであって、少しおかしい英語でも、おそらくインターナショナルな英語として通じていると思うんです。それがロンドンには溢れています。逆にちゃんとした英語はBBCの放送ぐらいしかないし、よくジョークで言いますが、ただそういう気持ちでいけばみんなしゃべれるし、もっと言えば、最近、僕は旅が多いものですから、新幹線に乗っていて、あのアナウンスで、英語で話しているのはとても気持ちがいいですね。あの感じで話しているのがとても良いと思います。たぶん旅行者もとても嬉しいと思うし、日本も変わってきたなとすごく感じさせるんじゃないでしょうか。あとは、音楽家としては、僕が一番初めに大ファンになったヴァイオリニスト、小学校4年生の時ですが、イツァーク・パールマン、ポーランド系のアメリカ人のヴァイオリニストで、もともとイスラエルの人ですが、この方は4歳の時にポリオに罹ってから、ずっと車いすの生活をしながら、世界で一番上手な、そして一番人気のあるヴァイオリニストです。僕はその方をずっと追いかけてきたので、そこにはいわゆる差別みたいなのはどこにもないです。音楽家の場合は、レイ・チャールズしかり、スティービー・ワンダーしかり、ハンディキャップを持ちながら、世界を制する方がたくさんおられますので、その辺はもっとフラットに見て、そして一緒になって何かをやるのが、特にこのパラリンピックみたいなものを象徴としてできていけば、どんどん国民に広がっていくんじゃないかなというふうに感じます。そんなところでよろしいでしょうか。

【小池知事】ありがとうございます。葉加瀬さんのご経験を通じて、大変具体的にお話しいただきました。ありがとうございます。それでは、萩本欽一さん、よろしくお願ひします。

【萩本 欽一様】

こんにちは。あ、びっくりした。私はですね、パラリンピックで言うと、今回、引き受けたときのお話をしたいと思います。私、ロンドンオリンピックを見たときに、

パラリンピックの開会式、それから、競技の観客席にいっぱいに入っている姿を見て、イギリス人が好きになりまして、ロンドンが好きになりまして、そのとき思ったのが、もし東京で行われるようなことがあったら、とにかくイギリス人に、イギリスに負けない観客席を作りたいと思っております。私のできる範囲の観客席をいっぱいにするという意味で、まず、私が先頭に立って、客席で競技を見たいと思っております。以上です。ぜひ、皆さんも一緒に観客席で座って、日本人の、東京人の心を世界中の人に見ていただきたいと思っております。以上。ありがとうございました。

【小池知事】

ありがとうございます。まさしく、私ども今、考えておりますのは、パラリンピックの会場が、満員になるということでございます。オリンピックの方のチケットの販売というのは、先日、締切があったわけですが、パラリンピックのチケットにつきましてはこの後、夏、もうそろそろ夏に差し掛かりますが、楽しみに待っていただきたいと思っております。ぜひ、パラリンピックの会場を埋め尽くすと、盛り上げるということで、ぜひご協力をお願いいたします。

【萩本 欽一様】

知事もいらっしゃいますよね。

【小池知事】

はい、応援したいと思っております。ありがとうございます。さて、それでは次に、稲垣先生お願いいたします。

【稲垣 具志様】

はい、みなさん、おはようございます。日本大学理工学部から参りました稲垣と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私の研究のテーマは、都市交通計画、交通工学といったものになってきます。道路であるとか、交通の旅客施設であるとか、そういったものの整備方法や安全評価について研究をしています。パラリンピックの素晴らしい体験を皆さんがするためには、やはり移動ができないと何もできないというところがございます。そのために、バリアフリーの環境を整備しましょうという話が展開しているわけですが、この環境の整備というと、エレベーターであるとか、ホームドアといった話が出てくるわけで、もちろんこれも重要ですが、先ほどから話はずっと上がっているとおり、その施設を使う皆様方お一人おひとりも実は環境の内の一つになります。例えば車いすの方がいる。白杖を持った視覚障害者がいる。その周りにいる一人ひとりも環境なのです。なので、その周りの人たちをどのように変えるのかという視点で、このパラリンピックは非常に大きな契機になるのではないかなと思っております。人間が変わるためには、まず関心を持たなければならない。そして、関心を持った人に、正しい情報をお渡ししなければならない。さらに、そこから引き

起こされる具体的な行動が出てくると、ようやく人々の環境が変わってくるのではないかと思います。言いたいことは山ほどあるんですけども、時間が限られておりますので、今日はキックオフですので、この後、2回目、3回目の中で、具体的にですね、皆様とお話をしながら、私も勉強させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【小池知事】

ありがとうございます。続きまして、大島先生よろしくお願いいたします。

【大島 隆代様】

早稲田大学の大島と申します。早稲田といいましても、都の西北のさらに西北の狭山湖の近くのキャンパスにあります。私の専門は、地域共生社会の実現のために、地域のなかでどのようにいろいろな人たちが支え合っていけばいいのかという非常に難しいところをテーマにはしているんですけども、例えばバリアフリーとか障害のことで言いますと、見えやすい障害もあるけれども、見えない、見えにくい障害があるということ。それとともに、私たちが、見ようとしなくていいことがすごく問題なのかなと思っていて、ただ、この見ようとしなくていいというのが、障害じゃなくて、社会的な障壁になってしまう、壁になってしまうということがあるといいます。そして理解を推進していくにはひとり一人の市民が自発的に考える機会が必要なのかなと思います。その考える機会の環境を整備することとか、意識付けをどうしていくのかを考えることができるヒントというのが、ミーティングの中にあつたらいいなと思っています。例えば、ボランティアをみんながすればいいというふうに考えることもあるかもしれないですけど、ボランティアはそもそも自由意志で自分から進んでやるという意味があります。また、自分の責任で活動をしていき自分を律するという意味もあります。例えば、成績がよくなるからやりましょうというのは違うので、市民のみんなが気軽に関わることができるように環境整備を考えていけたらいいと思います。皆さんと意見を交換しながらこれから考えていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

【小池知事】

ありがとうございます。続きまして、川内先生よろしくお願いいたします。

【川内 美彦様】

皆さんこんにちは。この間まで東洋大学の教授をやっていたんですけど、退職しまして、今は研究員という形になっています。レガシーとして何が残るかというのがやっぱりとても重要だと思ってまして、正直言うとですね、もうハードは間に合わないの、いかにして、ソフトと言われてはいますが、現在では合理的配慮という言葉でいわれていたりもするんですけども、人はがどういうふうにサポートしているか、無理のない範囲でサポートしているかということがとても重要だと思います。でその時

に考える視点としてですね、英語では障害のある方を disabled と言いますが、
現在の理解としてはですね、できない人ではなくて、社会においてできなくされた人
というような考え方になっています。ですから、社会の方に色々な改善点があるとい
うことを常に意識しながら、どういうふうな、私たちはこのハード、ハードとしては
いろんなものが残ると思いますが、それ以上にですね、人の態度というか、そう
いうものが残っていけばいいな、と思っています。私も、車いす生活になって46年
になりますけれども、その間私さまざまなアクセシビリティに接してきました。日本
ではバリアフリーと言いますが、世界的にはアクセシビリティ、アクセシブル
というふうに言いますが、どういう整理をするかという点ですね、やはりその
ハードの解決を目的とするのではなくて、人間が尊厳を持って生きられるような環境
をつくるための取組である、という姿勢が必要なのではないかと思います。以上です。

【知事】

ありがとうございました。まだバリアフリー、ハードの方、間に合うところをしっ
かりやっています。はい。では高橋先生、お願いします。

【高橋 儀平様】

はい、東洋大学の高橋と申します。私も川内先生と同じように、3月で退職しまし
た。私の方は先ほど事務局からご紹介ありました「福祉のまちづくり推進計画」に東
京都福祉のまちづくり推進協議会の中で関わらせていただいております。ありがと
うございます。今日は本当にこのような場にお招きいただきまして、感謝申し上げたい
と思います。

私の方から申し上げたいのは三点ほどあるんですが、一つは、やはり都の「福祉の
まちづくり推進協議会」の経験をしまして、一番心配しているのは、実は、2020
大会以降のバリアフリーのレガシーをどうやって作っていくか。ここはですね、先ほ
ど来お話がありました2012年のロンドン大会の中でも私が見た感じでは十分達
成できていないのではないかと感じています。東京が世界で初めてのバリアフリー
のレガシーを、どういう枠組みで、どういう仕組みで作るかということが非常に求め
られているのではないかと、というふうに考えています。ここを是非ですね、短い期間
ではありますけど少しでもその方向性が見えてくるとよろしいのかなというふうに
思います。それから、二つ目は災害の問題ですね、災害時に対して、大会開催に当た
り各方面で様々な議論がなされていることかと思いますが、やはり緊急事態、
自然災害にまだまだ十分に検討されていないのではないかと感じます。特に会場周辺
の避難場所、一時的避難所の検討が必要だと思います。そして、三つ目は心のバリアフ
リーの話が先ほど来ありましたけれども、子供たちは総合学習等でいろいろと動いて
いるところなんですけれども、指導する先生方自身が本当に体験学習をしているのか、
心配です。私も地域の中で障害者スポーツみたいいろいろやってきたんですけども、
先生方自身がそういう場にいらっやらないことが多い。そこですね。教える側、

伝える側の学びが不足して、これからのバリアにならないように何とか用意してかなければならない。

最後は私自身、建築ですとかまちづくりの専門なので、先ほど川内先生もおっしゃっていましたが、やっぱり建物だとか施設で、人の利用を区別しない。ここだけは何とかして理解し行動して欲しい。長期的な課題になると思いますし、あるいは永遠の課題になるかもしれませんが、その思いを持ってですね、バリアフリー社会、あるいはパラリンピックの準備に活かしていくようなそういう懇談会にさせていただければありがたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

【知事】

ありがとうございました。続きまして星加先生、よろしく願いいたします。

【星加 良司様】

はい、東京大学の星加と申します。私の専門は社会学という研究分野なのですが、その中で障害と社会の関連についての理論研究をしています。近年は東京都さんや、あるいは国の施策の中で「心のバリアフリー」に関わるところでお手伝いをさせていただいております。皆さんご承知かと思いますが、オリンピック・パラリンピックに関して国や都では「共生社会の実現」を目標として掲げており、また国際パラリンピック委員会のパラリンピック・ムーブメントが目指す価値の一つとして equality、平等ですね、ということが掲げられております。その観点から見た時に、スポーツイベントとしてのパラリンピック大会の成功ということと、共生社会や equality を実現することとの間には、やはり大きなギャップがあるんだろうと思います。例えば話をジェンダーの問題に置き換えて考えていただければ分かりやすいと思うのですが、女子スポーツがオリンピック種目になり、そこに観客がたくさん集まり、テレビの人気コンテンツになるということと、女性が公平に社会に参画できる状況が実現することとの間には大きなギャップがありますよね。これは知事もよくご存じのことだと思います。そうした観点から見た時に、やはり、先ほど来も出ていますけれども、2020年以降にきちんと実を結ぶような種を今のうちにきちんと蒔いておくことが非常に重要であろうと思っています。その点で、心のバリアフリーに関して一点だけ申し上げますと、これまで心のバリアフリーのイメージとして、マイノリティや社会的弱者に対していかに優しくなれるか、思いやりをもって接することができるかという観点から取組がなされてきたように思うんですが、ある意味でこれを転換していく必要がある。おそらく重要なポイントはそこではなくて、いかに、今マジョリティの側にいる人たちにとって都合の良い社会がつくられてしまっているのか、その結果、自分たちマジョリティの側が得をしてしまっているのかということに気づいて、それを是正するための具体的な実践をそれぞれが考えていくというようなマインドセットを作っていくことだと考えています。そのために、202

0年までにやれることはいろいろあると思っていますので、ぜひ皆様にもご協力いただいて、そうした取組を推進していければと考えております。どうぞよろしく願います。

【知事】

ありがとうございます。皆様方のテーブルの上に、このバッジが置いてあるかと思えますけれども、こちらは点字でできておりまして、そしてあの、触ってパラリンピック、オリンピックがあるということで、ぜひ心のバリアフリーを開く、そのドアを開く一助にしていただければと存じます。次は高桑様お願いいたします。

【高桑 早生様】

みなさんおはようございます。パラ陸上の高桑早生です。一アスリートとしてこのような素晴らしい会に参加させていただき大変光栄に思います。私はですね、パラアスリートと申し上げましたが、おそらく、皆さんから見ただいて、どこがパラアスリートなのかわからないと思います。先ほど大島先生がおっしゃっていた「見えない障害」の一つに入るのかなという、義足です。左足のひざ下が義足で生活しています。まあどういう形で競技しているのかなというのは、ハンドブックが、こういうのがあると思いますので、この陸上競技の欄の、義足の方がどういうふうな競技をしているっていうのをご覧いただければと思います。その、バリアフリーということでお話しさせていただくときに、今まで私が思い浮かぶのは、2012年のロンドンパラリンピック、この前にも何度もお話に出てきたかと思うんですけども、私その時選手として出場していました。あの時の風景であったり、こう、空気感というのは今でも忘れることはできません。同時にですね、パラアスリートとしてロンドンの地を訪れた時に、まあ何度かロンドンの地を訪れているのですが、その時にやはり、心のバリアフリーということ、決してロンドンという街並み、最新鋭のまちが広がっているわけじゃないんですね。むしろ本当に古い、地下鉄も深いところまでホームを降りていかなければいけないような駅もたくさんあります。その中でやはり人同士が手助けしあって、その困難を乗り越えている風景っていうのを、非常に短い期間の滞在でも多く目にすることがありました。そういうところから東京というまちも非常に、ロンドンであったり、まあ他にもお手本になるまちがあると思うんですけども、やはり今一番お手本になるのはロンドンというまちの成功であったりというのは、お手本になるんじゃないかなというふうに思います。一方ですね、やはり東京というまちは、古い街並みも広がりつつも、やはりハードの面のバリアフリーという点では、かなり進んでいるのかなというふうに、まあもっともっと快適にっていうのはあると思うんですけど、やはり2020まで、考えた時には、かなり高度なまちになってきているのではないかと思います。また十分皆さんおっしゃっているように、心のバリアフリーというのが非常に重要になってくるのかなというふうに感じています。海外でレースをしていますと、欧米諸国のアスリート、皆さん東京大会に来るのを楽しみにして

いるんですね。やはり欧米諸国からすると東京というまちはまだまだ謎に包まれているとか、一体どういうまちなんだろうっていう、どういうまちか知らないんだっていう声をたくさん聞きます。なので、おそらくそういう方たくさんいらっしゃると思うんですね。選手をはじめ、訪れてくれるお客さんたちにも心地良く過ごしてもらえるような大会になれば良いのかな、そのためにハードの面、ソフトの面、バリアフリーっていうのは非常に重要になってくるのではないかなというふうに思います。ありがとうございます。

【知事】

ありがとうございます。先ほどからロンドンというね、都市の名前が何度も出てくるかと思えます。いろんな面でロンドン大会、2012年に行われておりますけれども、参考にすべき都市であり、大会であったと、このように私も思っております。それでは二條様、お願いします。

【二條 実穂様】

車いすテニスの二條実穂と申します。私は車いすになる前、実は、住宅をつくる大工のお仕事をしておりました。仕事をしている最中に、足場という高いところ、大工さんが作業するところなのですが、そこから転落して脊髄を損傷し、車いすになりました。そのような経験ですとか、自分自身が車いすで生活するようになって初めて気づいたことが多くあります。それまでまっすぐだと思っていた道路が実はまっすぐではなく斜めに傾いていたんだなあとか、そのような小さなことも含めて、車いすになってから気づいたこともたくさんあります。そして、車いすテニスプレイヤーとして、選手生活の中でたくさんの海外遠征に行きました。そうした中で、海外で経験したことや感じたことを活かして、この場で、少しでもお役に立つことができたらうれしいなと思っております。先ほどもお話がありましたが、バリアフリーというものについて、障害がある人にとってのみ使いやすいというものではなくて、すべての方が使いやすいものになったらいいなと思っております。現状ですと、障害のある方が健常の方に何かお手伝いしていただく側に、どうしてもあるのかなと思うのですが、私たちにできることというのはあると思います。そういった部分、していただくだけではなく、自分たちも何かできるように、そして、それが心のバリアフリーにつながるものだと思っております。以上です。

【知事】

ありがとうございます。次に、根木さんお願いします。

【根木 慎志様】

はい、根木です。車いすバスケットボールをずっとやってきました。小池都知事からも話がありました、この活動は、主に東京都内、全国の、小学校、中学校、高校に

向けて、車いすバスケットボールの体験学習をしているんですけども、年間100校くらいやらせていただいています。今回、東京2020パラリンピックとバリアフリー推進に向けたということで、パラリンピックがみんなにとって、パラアスリートはもちろんのこと、みんなにとってどういう価値があるかということ伝えていくことが必要で、都知事のお話にもあったように、車いすバスケットボールをさせてもらいましたが、ちなみに都知事は、シュート20回やられました。20回やられて20回目でやっとシュートが入ったと。すみません(笑)。本当にもう、打ち続けていただいたんですけども。それで、そのパラリンピックという大会を通じて、人間の可能性であったりとか、チャレンジすることの素晴らしさっていうことを伝えてると思います。あとももちろん、そこに参加して、障害についても学ぶこともできるので、そういう活動がどんどん広がって行って、社会にもパラリンピックであったりパラアスリートを見る、見方が大きく変わっていているのは確かだと思います。でも、パラアスリートだけが障害者ではないし、世の中には障害だけではなくって様々な人がおられるので、そのバリアフリーという考え方が、ハード面ももちろんなんですけど、ソフトの方をどう伝えていくのか、もっとも大切だと思います。もう三年前になるんですけども、リオパラリンピックの閉会式、都知事が参加されて、フラッグハンドオーバーセレモニーだったと思います。スリーアギトスフラッグを都知事が渡されたことも会場で見守ってたんですけども、あの時のコンセプトが「ポジティブスイッチ」っていうことでとても素晴らしいことだと思います。「ポジティブスイッチ」っていうのは、この大会を史上最高のイノベーションで世界にポジティブな改革をもたらすというコンセプトだったんですね。とても素晴らしいことだと思います。ポジティブに、いろんな物事を考えていく中で、バリアフリーを推進する中で最も大切なのは、かつて見られたように、みんなが友達のように考えられる、気軽に声を掛けられるようなもののベースの中で、ハード面が進んでいくことが大切なのかなと思っています。そのことを考えると東京がみんな友達のように過ごしていけるような都市・東京を目指す、日本を目指すようにできたらと思います。引き続きよろしくお願いします。

【知事】

はい、ありがとうございます。次に三浦さんお願いします。

【三浦 浩様】

パワーリフティングの三浦と申します。外見だけ見てもらおうと痩せているので、パワーリフティングの選手に見えないんですけど。一応、僕54歳で、東京ビッグサイトに今勤めているんですけど、まだ現役で。今はロスパラリンピックまでは現役でいようかなと、65歳までは現役でいようかと。その中で、今私が現役の選手として、東京2020に向けてこんな問題なんじゃないかと思うのを何点か挙げさせてもらおうかと思っています。まず一つは宿泊の中でバリアフリールームというのが、今増えてはきているんですけど、一人で使うには料金が高すぎる。じゃビジネスホテルがどうかっ

ていうと、日本のドアの規格っていうのは少し狭いんですね。そうすると車椅子の幅で入れる人というのはコンパクトな人です。僕らパワーリフティングの選手、海外の選手は大きい方が多いので、車椅子の幅が80 cm、90 cmある人が結構いるんです。そうするとトイレにも入れない。お風呂にも入れない。あるのに使えないという形になっているのが、ちょっと現実に見えてきました。あとはですね僕らは普通の車椅子なので、段があってもある程度介助してもらえば行けると思うんですけど、電動車椅子の方ってフラットじゃないと走れない。というのは、電動車椅子って100キロ以上あるんですよ。人と車椅子と合わせて160キロ、170キロで、これを普通の人で介助するっていうのは非常に難しい。東京とか見てもらって、やっぱり建物の基礎の構造上、なかなか段差があるビルなんてものは、多いなと感じます。その中で僕の知り合いの電動車椅子の方はフラットなところは入りやすいですけども、段があるところを、僕を持ち上げてもらって、そこに入ってまで食事をしたいというのは思えないということ。これ結構、聞こえるんですね。そういう面でも、もう少し構造上やはり段差の多い店もありますので、外見でなく、内見もそういうところは工夫してもらいたい。あと、やはり歩道とお店の段差ってスロープ付けても結局改造しなくちゃいけなかったりとか、歩道にスロープが出てしまうと、法律上設置できなかったり、もう少しなんとかしてもらえるかなという部分と。アメリカで階段のあるお店って、階段の下にインターホンがあるんですね。そこを押すとお店の人が出てきてもらえるんですけど、逆に東京もなにかそういうお店が増えてもらいたいとか、補助金でそういうお店で少なにかインターホンで僕らが買いやすいお店が増えると、さらに海外から来た方々は喜んで入りやすいんじゃないかなと思います。

あと、私パワーリフティングやってるんですけど、最後になりますが、東京国際フォーラムで試合があるんですけど、男子10階級、女子10階級あります。国際フォーラムの普通のキャパシティ5千人なんです。ていうことは、私達は完全に入れ替え制なんです。男女でなんと10万人呼ばなきゃいけないんですね。そのお客さんをいっぱいさせるためには、僕たちはいろんなことをどんどん進んでやりたいんですけど、なかなかやはりハードルが高かったりとか、私たちが機材を運ぶ上で費用の問題とかで簡単にはできないスポーツになってきているんですけど。やはり10万人を国際フォーラムを満員にして歓声を浴びたいなと本当に思います。ロンドンの時は5千人のキャパは満員でした。そういうのは東京でも実現したいなと思いますので、是非皆さんご協力お願いします。ありがとうございます。

【知事】

ありがとうございます。大変具体的な話を何点がしていただきました。宿泊施設については、おっしゃるとおり、ドアの広さがそもそも部屋に入れなかったら、車椅子の方が。それでは何も始まらないということから、ドアを広げていただくということで、「OPEN STAY TOKYO」っていう条例も作りまして、宿泊の施設の方々いろいろなサポートをして、そして進めていくところであります。その他大変具体的な話あり

がとうございました。続きまして、葭原さんお願いします。

【葭原 滋男様】

陸上競技、自転車競技をやってきました葭原と申します。今現在5人制サッカーやブラインドサーフィンを中心に活動しています。私は視覚障害ということもあり、声かけ運動が気になっています。最近の体験として、バスを乗ろうとしていた時に、一緒に並んでた方がいらっしゃったんですが、声をかけていただかずに追い越して乗車してしまいました。バスの運転手も気が付いて待っていてくれたようなのですが、それに気が付かず、乗車位置がわからず苦勞したことがあります。その時にちょっと声をかけていただけるといいのになと感じました。また今朝の出来事なんですけど、大江戸線に乗ったんですが、乗り込むとすぐに女性の方が「こちら空いてますよ」とさりげなく声をかけてくれて誘導してくれました。非常にありがたく思いました。声をかけてみたが、どうしたらいいかわからないという方が非常に多いなと聞きます。そこで躊躇せず、もう一步踏み込んでさりげなく声をかけられるような環境を作っていくことが必要かなと思います。また自転車競技もやってきました。自転車競技をもっともっと盛り上げたいなと思います。私は視覚障害者なので一人では自転車に乗れません。二人乗りのタンデム自転車じゃないと自転車に乗ることはできないんですが、今現在、東京でタンデム自転車の一般公道走行が認められていません。街中でそういう自転車が走るのを見ることによって、都民の方々も関心を持つし、興味を持ってもらえるんじゃないかなと思います。是非、一般公道の走行を認めていただけないかをお願いしたいと思います。もう一つ、当日会場を盛り上げるために、大手企業の方々には非常にスポンサーしていただき、活動を支援いただいていると思うんですが、中小企業の方々も取り込んでいきたいと思っています。一つの提案ですけど、障害者雇用率を達成できていない企業には、何かしらの競技を応援することを要請していくというのも面白いんじゃないかと思っています。以上です。

【知事】

葭原さん、ありがとうございます。具体的なポイントを突いていただきました。今日、東京商工会議所の皆さんとオリンピック・パラリンピック頑張っていこうと、そういう会合でございます。改めて、いろんな企業の方、大企業から小さなところも、皆さんそれぞれで何ができるか考えていただき、実行していただくようなムーブメント、今日の会議はまさしくそのためのものでもございます。ありがとうございます。続きまして、林家一門、正蔵さん。よろしくをお願いします。

【林家 正蔵様】

落語家の林家正蔵です。

21年前飛行機の中でたまたま隣に乗り合わせた学生さんが聴覚障害、耳の不自由な方でした。メモ用紙を取り出して「落語が聞いてみたい」というメモをいただきま

した。どうしても聴覚に障害のある方は落語というものを楽しむことができなかつたそうなんです。一念発起して、手話を覚えて、手話で落語をやった経験があります。今の高座では改善されましたが、高座からお客様を拝見していると、車椅子のお客様、盲導犬を連れていらっしゃるお客様、どうしても一般のお客様よりも見づらい場所に居たり、聞きづらいところに居たり、そんなもどかしい思いがあります。ですから今回のパラリンピックも、もちろんアスリートの皆さんもそうでしょうけれども、障害をお持ちのお客様にどう楽しんでいただけるか、そこら辺をポイントにご考慮いただければと思います。お役に立っていければと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

【知事】

ありがとうございます。こん平さん、どうでしょう。よろしく願いします。

【林家 こん平様】

こん平です。

【笠井 咲様】

よろしく願いいたします。本日、一般社団法人林家こん平事務所の代表理事をしております娘の笠井と申しますが、少し補助させていただきたいと思っております。本事業におきまして、政策企画局そしてオリパラ準備局、福祉保健局、都市整備局のこの4局からなりますこの事業に参画させていただきまして、また父を選出させていただきまして、大変にありがとうございます。皆様もご存知のように父は16年前に難病を発症し、それ以来、紆余曲折ございましたけれども、現在は車椅子を余儀なくされている現状でございます。しかしながら、東京都内では商店街で行う「しょうてん会寄席」、長らく国民的番組、笑点に出演してございましたけれども、出演できなくなった代わりにと言いますか、商店街を賑わい活性化していくということで、「これがほんとのしょうてんかい？」というような（笑）コンセプトで事業を展開させていただいております。これまで私どもの方では東京都の100年あまりの都電を利用した、この都電の中で落語を行うという、都電落語会を本年5年目になります。くしくも2020年を目指して、オリパラを目指そう、特にパラリンピックを賑わせていこうというコンセプトでスタートいたしましたけれども、今回、正蔵師匠からも聴覚障害のお話がありましたが、私どもとしては、また視覚障害の方に向けた落語を提案できないかということで、地方自治体でございます新宿区の方に今回企画をお持ちしたところ、ご採択いただくことができました今年度中に視覚障害者に向けた落語を都電の中でさせていただきます。父は新潟出身ということで、上野駅を利用することも多くございますけれども、この上野駅もかなりハードの面では遅れているかなという実感でございます。父は調子のいい時には「一、二、三、ちゃらん」ではなく、「一、二、三、パラん」ということで、パラリンピックを先導しようというような、新しいギャグということで、メディアにも露出させていただきました。今後も賑わい活性、そして地方をも文

化創造都市ネットワークなどで東京に注目ができるように、尽力して参りたいと思います。こん平師匠、今日は一、二、三、パラーンはできますでしょうか。一、二、三、パラーンをお願いします。

【林家こん平様】

それではまいります。一、二、三、パラーン！（拍手）

【小池都知事】

ありがとうございます。本当に素晴らしい取り組みをされておられて、感動でございます。ありがとうございました。

続いてオリンピック、野球、中畑さん、よろしくお願いします。

【中畑清様】

知事、俺の役割というのは応援大使ということですよ。役割として、今皆さんのお話をずっと聞いてきて、こういう役割みたいなものは皆さん持っていますよね。自分が考えたのは、どういう役割がよいのかなというふうを感じるのは、やはり各競技の魅力をどのようにメッセージで送っていくかという役割が一番重要なのではないかなという感じがするんです。そうしない限り満席にもならないし、ファンの心を掴むというのは我々現場でやってきたものですから、集客する要素というか、そういうのには長けているところがあるんです。DeNAでも、ここまでにしたのは私の力ですから。観客をどのように集めるかというのは、もう皆さんは経験もあるでしょうが、現場でやっていてお客さんがいない競技ほどつまらないものはないです。ただ、自分なりに応援団長として。応援団長ではないですけど、応援大使としてやっていきたいなど。

もう一つは、何年前ですかね。僕は全盲の方と盲導犬育成のチャリティコンペをやっていたのですが、その時に世界チャンピオンの全盲のプレイヤーと、この人も全盲なんです。対応の仕方というんですかね、変に気遣うことによって、相手を傷つけてしまうのではないかなというくらい、その言葉。スコアは私よりも良いんです。全盲の人のほうが遥かにスコアも良いし、目の前でナイスパーとか取っちゃうんですよ。それを見た時に、全盲のおばさんが「あんた失礼ね、健常者の前で。なんであの人より良いスコア出しちゃうの。」みたいな、笑いを取るような気遣いをしてくれるんです、逆に。その時、ああ違うなと思いました。恥ずかしかった。下手に障害者の方に対して変な気を遣うよりも、まず自分たちが対応する気持ちを持つことの方がよほど大切なんだということを教わった気がするんですよ。ですから、今回のパラリンピックの中で、いろんな人、選手に対しても、そういった気持ちを持ちながら接していくべきだろうと思っています。どう感じるかは当人によって違うとは思いますが、もちろん健常者、障害者の方へ対して気持ちをもって対応したいと思っています。以上です。

【小池都知事】

ありがとうございます。とても分かりやすいお話、聞かせていただきました。続きまして、新婚さんです。高橋みなみさん、お願いします。

【高橋みなみ様】

皆さんこんにちは。高橋みなみです。私はTOKYO FMの「高橋みなみの『これから、何する？』」という番組内で、「高橋みなみのパラアスリートに会いたい！」というコーナーをさせていただいておりました。選手の皆さんをお迎えして、パラスポーツの魅力・その思いをお伺いして、勉強させていただく日々だったんですけど、本当に知れば知るほど、知らないことが沢山あって、そして面白くてカッコいい魅力的な競技ばかりだったので、より多くの方に知ってほしいなと思っています。そのためには、まず見る（観戦する）聞く（選手の皆さんに話をお伺いする・観戦した方の感想を聞く）そして体験するということが大事なのかなと思っています。パラリンピックまで442日です。442日というと、きっとあつと言う間なのかなと。私は人を動かすのは人であって、熱意と活気があれば人は動くのではないかなと思っています。皆さんと協力し合いながら、一人でも多くの皆さんに協力を、そしてバリアフリーへの関心を持っていただけるように頑張っていきたいと思っています。よろしくお願い致します。

【知事】

ありがとうございました。続いて同じく放送関係でありますね。大橋さんお願いします。

【大橋 未歩様】

皆さんこんにちは。大橋未歩と申します。私は元々テレビ東京でアナウンサーをしていたんですけども、その時に3度オリンピックに取材に参りました。34歳のときに脳梗塞になりまして、その後、ぜひパラリンピックを伝えたいという気持ちを持ち始めました。現在は退社しまして、パラ卓球のアンバサダーをさせていただいています。数々の選手を取材していく中で、2つとても印象に残った言葉があるんですけども、まずその1つが「優しい差別」という言葉なんですね。選手の皆さんは海外遠征なども行かれていて、そこで感じられるのが、日本のハード面というのはそんなに悪くはないんですね。例えば、舗装されている道路なども、海外の方がひどかったり、ただ、海外だと気軽に皆さん声をかけてくださるんですよね。ちょっと困っている顔をしていると、すぐに手伝ってくれると。日本の場合は、皆さん優しいんだけど、優しいからか、気を遣って、なかなか話しかけてくれなかったりとか、結構線を引かれてしまうと。それを、その選手は「優しい差別」が日本にはあるんですよねというような言い方をされていたんですよね。私自身も自戒の念を込めて、非常に衝撃を受け

た言葉だったんですけれども。そして、もう1つの言葉が、先ほどユニバーサルデザインという言葉が出ていますけれども、ユニバーサルデザインの先に行く「インクルーシブデザイン」という言葉なんですけど、そのインクルーシブというのは「含む」という意味なんですけれども、日本の場合は、なかなか何かをデザインするという時に当事者のヒアリングとかが反映しきれていないということが多い気がするのと、その選手はおっしゃっていました。なので、何かを考える時点で、当事者の声をインクルーシブ、含むという、インクルーシブデザインというのを念頭にこれから、ハード面がデザインされていくといいなとおっしゃっている選手がいました。私は、今パラ卓球で、こういった状況を打破するために、いろいろ活動していますので、そういった具体的な活動はまた、今日は時間がないので、後日お伝えできたらなと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【知事】

ありがとうございました。続いて、猪狩さんお願いします。

【猪狩 ともか様】

皆さんこんにちは。地下アイドルグループ・仮面女子の猪狩ともかと申します。私は、昨年の4月に強風で倒れてきた看板の下敷きになり、脊髄を損傷し、今、車いすで生活をしています。事故によって失ったものもたくさんあったんですけれども、得たものもたくさんあって、その中の一つがパラスポーツとの出会いです。そして、私はEテレのパラマニアという、パラスポーツをクイズ方式で深掘していく番組に出させていただいています。先ほどから何度も出ている心のバリアフリーという言葉があるんですけれども、日本人の心のバリアフリーがそこまで進んでいない要因としては、障害者のことをかわいそうと思ってしまっていること。そして、障害者の方がどのように困っているのか、どのような症状なのかというのを分からないから、心のバリアフリーがなかなか進まないんじゃないかなと思っています。その心のバリアフリーの要因を取っ払ってくれるのは、きっとパラスポーツなんじゃないかなと思っています。私は、パラスポーツの選手の障害を障害と思わせない、むしろ、障害を時には武器にして戦う姿にとっても感動しました。そんなパラスポーツの魅力をこれから広めていきなないなと思っています。今回、パラ応援大使ということで、とてもありがたい役割をいただいたので、たくさんたくさんパラスポーツの魅力を広めていきたいなと思っています。よろしくをお願いします。

【知事】

ありがとうございました。はい、今日は地味ですね。テリーさんお願いします。

【テリー 伊藤 様】

遅れてすみませんでした。朝、生放送が入りましたので、ちょっと遅れてきました。実は私先日ですね、ブラインドマラソンの米岡さんという方と駒沢公園で一緒に走っていて、私も普段走っているので気合を入れて一緒に走っていたんですけども、走ってすぐですね、「テリーさん早すぎる」、早すぎるというのは僕が早いのではなくて「足の歩幅が大きすぎる。私たちは目が見えないので、見えている人に小幅で走ってもらえないと困る」と言われて、「ああそうか、ごめんなさい」と言って、何週か走ってへたってしまったんですけども、その後一緒に近くのファミリーレストランに入りまして食事をしたんですけども、その時に「よねおかさん、何か困ることある？」と聞きましたらですね、「いやいや僕らのことをみんないい人だと思っているんですよ」と。まあ障害者でスポーツをやっている。「別にいい人じゃないんですよ。女性も好きだし。」「そりゃそうだよね。」「だから普通に扱って付き合ってくれる方がよっぽどいいんです」と。「でどういう女性が好きなんですか？」「そりゃあ、グラマーな人がいいです。」ま、そんなことはどうでもいいんですけど。（笑）

そのようにですね、すごく話が盛り上がり、「じゃあちょっと一緒に（聞き取れず）ぐらい行きましょうか。」とかですね、本音トークを色々話してくれてですね。そしてもう一つパラリンピックということなんですけれども 障害者がほとんどだと。そういう人こそ恋に悩んでいたり。埼玉県で一人暮らしをしているんですね。「料理どうするの？」と。「これが大変なんだよ」って。自分で一人で料理をして騒いでいるんだけども。

もちろんオリンピック・パラリンピック出るのも大切なんですけど、日々日常そしてアスリートとして終わった後どのように生きるか、その辺のところもですね、本音トーク気持ちみたいなものも話すことによって、テレビで出ることによって、「あっ、この人普段は全然違う持ち味があるんだ。いいなあ、この人応援してみようかなあ。」と。

どうしてもマスコミというのは、こういう人たちをカッコよくドラマチックに紹介しがちなんですけど、そうじゃなくてこんな間抜けなところもあるんだというのを紹介することによって、僕らも身近に感じるし、応援していく感じがするんですね。

先日、地域の車椅子ラグビーを見させてもらったんですけども、あの時も終わった後、あいつらとんでもないなあ。それがものすごいおかしくて。

ぜひ皆さんもそういう本音トークの部分も気持ちも感じながら見てもらえると更に面白いのではないかと思いますので、中畑さんのことをあんまり信じないようにして、中畑さんと一緒にですね、今後私も頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願ひいたします。

【中畑 清 様】

よろしくお願ひいたします。

【知事】

でも、あの皆さん大変率直な、そしてまた学識経験者の皆さまからはなすべきことについての様々な議論も含めてサポートしていただけるものと大変心強く思いました。また、アスリートの皆様方は、本当に現場からの声として参考になるご意見たくさんいただきました。またそれぞれ音楽やお得意の分野を生かしつつ、パラリンピックの応援大使として、そしてパラリンピックのみならずバリアフリーへの応援大使として特命全権としてどうぞよろしく活動お願いいたします。

今日ご出席いただけませんでした田中ウルヴェ京さんそれから花岡伸和さん村岡桃佳さん、それぞれメッセージをいただいておりますのでご紹介したいと思います。お願いいたします。

【小野部長】

ではまず田中さんのメッセージです。

「田中ウルヴェ京でございます。本日は出席が叶わず本当に申し訳ありません。現在、私は、なでしこジャパンのメンタルトレーナーとして、女子サッカーワールドカップがおこなわれるフランスでチームに帯同中です。東京 2020 パラリンピック成功とバリアフリー推進は、人生 100 年時代をむかえる我々一人一人にとって重要な課題です。

私自身の元オリンピック選手およびコーチの経験と、車いすバスケットボール男子日本代表チームでのメンタルトレーナーとしての経験から、ハード面ソフト面両方のバリアフリー推進についてご協力できれば幸いに存じます。」

次に花岡さんのメッセージです。

「パラリンピアンの花岡です。この度は 2020 大会の成功、またレガシー創生に向けた懇談会へ参加できることに大変な喜びを感じております。また、錚々たるメンバーの皆さまのお力でそれらが実現可能なものだと強い確信を抱いております。初回の懇談会に出席できず非常に残念ですが、今後の展開がとても楽しみです。私も末席で微力を尽くしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。」

最後に村岡さんのメッセージです。

「この度本懇談会メンバーに任命を頂き大変嬉しくまた、来る東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けての取り組みの一端に参画できる事を大変光栄に思っております。本日は学業とスキー競技と新たに挑戦する陸上競技のための練習都合にてやむを得ず欠席とさせていただきます。次回以降の機会を心待ちにしております。よろしくお願い申し上げます。」

以上です。

【知事】

はい、ありがとうございました。本日こうやってキックオフミーティングにご参加いただきました特命全権応援大使の皆様方から大変貴重なご意見たくさんいただき

ました。全てテイクノートいたしまして、できるところ、すぐ取り組んでいくべきところなど早速皆様方のご意見反映できるようにして参りたいと思います。

言い残してこれだけは言っておきたいという方いらっしゃいませんか。大丈夫ですか、萩ちゃん。

【萩本 欽一 様】

選手のみなさん、私見に行きますから。

【知事】

ありがとうございます。皆様方からお話を伺っておりまして、ロンドン大会ということが何度か出て参りました。2012年のロンドン大会、本当に東京大会を行うにあたって、いくつも参考にしたい点がございます。その最大のポイントがパラリンピックの成功なくしてロンドン大会の成功はなかったというぐらいパラリンピックに力を入れられた大会であります。これを東京のレガシーにしていくべく皆様方のご意見今後ともよろしくお願いを申し上げます。

そのほかロンドン大会では、例えばテレワークがそこから定着をしたということをよく聞きます。大会開催中の交通管理などにおいては都民の皆様、企業の皆様それぞれにご協力いただくという点でもこのテレワークというのは働き方改革にも繋がっていくと。それから体が不自由な方々でもテレワークによって仕事ができるということなど大きく生活を変えるきっかけとなったのがロンドン大会と聞いております。色々な面で参考にしていきたいと考えております。

それから皆さま方からお話伺っておりまして、私いつも申し上げるんですが、日本の武道、柔道とか空手、これはいつも心・技・体だといいます。これは、このバリアフリー社会にしていく、パラリンピックを成功させる、そのためにも同じ3つの要素だと考えております。

心、これはお話ございましたように インクルーシブな共生社会にしていく、またどのような気遣いをすべきなのか、いやいやあまり気遣いをすることが逆に駄目じゃないか、いろんな話伺いました。全部心のことであったと思います。まとめて言うと心のバリアフリー。また、意識を共有することによって方向性を作っていくムーブメントですね。ということでもまず「心」。

そして「技」は、例えば車椅子も最近とても改良されているということを聞きます。ホームドアについても、これも技術面でのサポートになるかと思えます。バリアフリーにしていくという面で、技術面など様々なサポートが、多言語化については、ITによってそれが解決策になっていくといひましようか、技術面でチャレンジ、ここが日本のものづくりを活かしていくということになるかと思えます。

最後に、体となりますが、これは、健康という体の面と、制度や体制という面で、先ほど申し上げましたように、バリアフリーのホテルにするために、何センチメートルの入り口にするといった制度、それに対して補助金をいくらにつけていくのかとい

うことも制度でございます。

この3つの心技体が重なりますとパラリンピックの成功やバリアフリーの推進に向けた東京都が目指せるのではないかと、このように思っております。

今日は、本当にありがとうございました。皆様方の貴重なご意見をベースに、これから、大使の皆様方とこの会を進めさせていただければと思います。

次回について、私の方から説明いたしますね。次回の懇談会についてでございますが、皆様方のご予定を伺いつつ、8月下旬から9月上旬頃を目途に、場所を大会会場のひとつ、今どんどん出来上がりつつありますので、そこを見ていただくということで、海の森でよいですね、ボートとカヌーの会場になります海の森、江東区にあります、ちょっと遠いのですが、ぜひご覧いただければ。そこでは、ボートとカヌーが行われます。先日行ってまいりましたが、お手洗いとかシャワールームとかバリアフリーとなっております。客席のほうも車椅子の皆様方がきちんと座れるスペースなど、いろいろな工夫がされておりましたので、実際にご覧になっていただければと思います。また、お伝えをしたいと思いますので、ぜひご参加いただけますよう、よろしく申し上げます。どうぞ、心技体でまいりましょう。よろしく願いいたします。

【横山理事】

以上を持ちまして、懇談会キックオフミーティングを終了といたします。

次回につきまして知事のほうからお話しがございましたが、調整の上、改めてお知らせをさせていただきます。